

令和4年度 部局経営目標（達成状況）

年度	令和4年度	作成日	令和5年3月31日
部局名	湯原振興局	部局長名	畦崎宜久

(1) 部局の役割・使命（ミッション）・経営方針

1 災害に強いまちづくり【No.11：住み続けられるまちづくりを】

市民の安心安全な暮らしを守るため関係機関・団体と連携を密にし、地域防災意識の向上と地域連携を図り、地域防災力の強化を図ります。

2 生涯を通じた健康づくりの推進【No.3：すべての人に健康と福祉を】

持続可能な地域社会を実現するための基本となる健康づくりに、各団体等との連携を図りながら取り組みます。

3 地域の強みを活かした地域振興【No.11：住み続けられるまちづくりを】

歴史、文化、風土、景観など地域の強みを活かした市民主体の振興事業や特産品を活用した商品開発などの地域内経済循環を推進し、豊かで自立した農山村の実現及び来訪者・関係人口の増加を目指します。

4 移住・定住の促進【No.11：住み続けられるまちづくりを】

移住者や関係人口獲得など、持続可能なまちづくりを目指す地域団体等の活動を支援します。

5 地域の特性を生かした産業振興【No.11：住み続けられるまちづくりを】

豊かな地域資源（風習文化・伝統工芸・自然景観・食文化・農林畜産物等）が次世代に引き継がれるようにブラッシュアップし、観光事業に積極的に活用していくことで地域の魅力を全国に発信し、さらなる交流・定住人口の増加を図ります。

6 生み育てやすい環境づくり【No.3：すべての人に健康と福祉を】

安心して子育てができる環境を確保するためライフスタイルにあわせた支援をおこないます。

7 行政財産の有効活用【No.12：つくる責任つかう責任】

市民の共有財産である「行政財産・公共施設」について、一層の有効活用のため、地元の意向を把握しながら、管理運営形態や複合的な利用手法を検討します。また、地元協議やHP等での情報発信も積極的に実施します。

(2) 事業成果目標

指標名及び目標値

1-1 自主防災組織の強化

・組織化された自主防災組織の機能強化と災害時における取り決め状況を把握するため現地確認を行い、防災マップとの整合性を図ります。各自治会のヒアリングを実施しながら顔の見える関係をつくり、災害時における各団体（消防・防災組織・自治会・区・医療）の連携強化を図り、きめ細かな対応を実施します。（3年計画の2年目）

指標：自治会のヒアリング数			
目標値	実績値	評価	次年度への課題
25自治会	30自治会	自主防災組織の母体である各自治会の代表者から聞き取りを行い、危険箇所、災害時の取組み等各地域の現状・課題の把握に努めた。災害時の対応を誰が中心になってやっていくか確認した。	引続き聞き取りを行いながら聞き取り内容を整理し、防災マップとの整合性を図りながら、災害時における迅速できめ細やかな対応を実施する。

2-1 健康づくりのための実践活動支援 ①糖尿病予防や健康寿命の延伸を目的として、定期的に運動をする機会（プログラムと場所）を提供し、併せて地域が主体的、継続的に取り組めるようフォローアップを行い、参加者の増加に努めます。また、健康推進課などと連携し、活動の数値化を目指します。 ・第4期まんぼジム（ウォーキングやスクワット） <目標参加者60回×6人@360人> ・貯筋体操 <目標参加者4回×15人@60人> ②フレイル予防や筋力アップを図り、健康寿命の延伸を目指します。 ・ニュースポーツ教室（ポッチャ、吹き矢）<目標参加者3回×10人> ③生活支援コーディネーターや真庭市地域包括支援センター、社会福祉協議会等と連携し、地域住民が自主的な活動として集いの場を開始できるように支援します。 <目標働きかけする団体数 2団体> ④二川地区で開催する健康体操に、愛育・栄養委員の関わりを持って支援します。	指標:①参加者数 ②集いの場働きかけ団体数			
	目標値 ①600人 ②2団体	実績値 ①721人 ②2団体	評価 ・コロナ禍においても、定期的に運動ができる環境整備ができ、参加者数を増やすことができた。 ・運動内容に、体組成測定を取り入れた。測定値から筋力アップには継続的な運動継続つなげることでできた。 ・二川地域で健康体操を月1回のペースで行っている。本庄地区との話し合いも進めている。ひまわり館を母体に「集いの場」の設立できた。	次年度への課題 ・第5期まんぼジムの企画し、引き続き継続的に取り組める環境をつくる。 ・愛育委員・栄養委員の活動の一つとして協働できる内容を企画する。 ・本庄・二川地区も引き続き協議していく。
3-1 地域振興事業（社地区） 社地域振興協議会を中心に、社の歴史資源を活用した地域づくりを支援します。 ①社の歴史資源を広報・再確認 ・歴史や棚田景観に関心があり、社の応援団となってくださる方を増やすため、前年度からの継続したテーマでシンポジウムの開催 <目標実施数 60名程度のシンポジウム×1回> ・社棚田が「つなぐ棚田遺産」に認定されたことにより、地域の「景観」について関心が高まっている。蒜山郷土博物館と連携して、歴史の伝承や景観維持のために何が必要なのか湯原地域単位での勉強会の開催 <目標実施数 勉強会×3回> ②グリーンスローモビリティの活用 ・歴史ガイドの開催 <目標実施数 15回> ・公共交通のモデル構築（デマンド運行に向けた実践）<目標 地域と協議をして実践> ③地域の特産品を活用した「なりわい」作り（やしるもちの販路拡大、竹の活用ほか） ④地域と都市部の交流イベント（交流施設の改修、秋祭りの神輿担ぎ、歴史体験交流、竹灯籠イベントなど） <目標実施数 交流イベント×3回>	指標:①シンポジウム開催数 ②勉強会開催数 ③歴史ガイド実施数 ④交流イベント回数			
	目標値 ①1回 ②3回 ③15回 ④3回	実績値 ①1回 ②2回 ③15回 ④6回	評価 ①シンポジウムを3月に開催。60名を目標。②地域向けの勉強会を2回開催。市内に呼びかける。③ガイドツアー（は市内バスツアーの方の参加があった。観光局との連携で広報効果があった。④地域と都市部の交流（秋祭りの神輿担ぎ、歴史体験交流、竹灯籠イベントなど）を開催。やしるもちの田植えから稲刈りもちつきまで都市部の方との交流を深めた。	次年度への課題 農林水産省のつなぐ棚田遺産の「社棚田認定」もあり、今後更に景観整備などを行い、外部からの来訪者のためのガイドや地域内の生きがいややりがいに繋がる取組を進めて行く必要がある。シンポジウム・勉強会、また空き家を活用した拠点も完成したことによる「集まり」を増やし、地域の歴史景観への関心への醸成を深めたい。

4-1 地域振興事業（二川地区） 二川みらいづくりセンターを拠点とした、住民の裁量による地域運営の幅を徐々に広げていき、真庭に新しい形の「自治」を生み出す。 ①大学と連携した施設の活用方法や、地域の皆さんとのつながりづくりの学びの場の開催 ＜目標回数 3回＞ ②学校らしさを生かした学びのコンテンツを盛り込んだワークショップの開催 ＜目標回数 4回＞ ③地域内での課題解決を図る世代を超えた集まりや話ある場づくり ＜目標回数 勉強会3回＞ ※上記を実践して、二川地域内のつながりづくりと多方面からの交流人口を増やす。 【二川みらいづくりセンターはこんな場所】 ・行政の縦割りに左右されず、住民がやりたいことを実現できる場 ・老若男女問わず、住民が日常的に集まり、自主的な活動ができる場 ・地域を維持させていくために必要な経済を生みだせる場 ・さまざまな価値観が生まれていく場 ※新しい形の自治を生み出すことで、地域内から移住者やUターン者の必要性に気づき、これまでの目標であった「移住・定住（空き家活用含む）」の取り組みにつなげていく。	指標:施設の利用者数			
	目標値	実績値	評価	次年度への課題
	4,000人	5,047人	二川みらいづくりセンターを学校らしさを残す交流の場、地域の問題解決の場として活ユーザー数を増やした。地域内の組織も従来の二川ふれあい地域づくり委員会に加えて、若者による地域活動のための組織が新たに立ち上がっている。子どもを中心とした地域外の人との交流も始まっている。	今後は、二川みらいづくりセンターを拠点とし、稼ぐことを考える事が必要。 地域人たちは集まれる場所や、地域外の人と気軽に交流することができるような場所にしていきたい。 地域内の課題解決に繋がるような取組ができる場所づくりを進める必要がある。

<p>5-1 地域の特性を生かした産業振興（組織連携による観光振興）</p> <p>湯原温泉への誘客増に向けて湯原地域振興計画に沿い、関係団体との連携を深め、一体的な魅力向上に取り組みます。</p> <p>※湯原の里振興プロジェクトで、湯原のみでなく蒜山や勝山との連携についてアイデアを出し合い事業を実施していきます。</p> <p>①湯原温泉「まち」プロジェクト 古い温泉地としての歴史を残しつつ、新しい「まち」としての魅力を高める。（地域で遊休施設の利活用、連携した情報発信、蒜山とのつながりづくり） ・完成したテレワーク施設の有効活用や活用プランの協議を行い、観光拠点としての宿泊地（終点）を目指す。</p> <p>②ひまわり館・RVパーク・まんが館（旧二川小） 自然や動物と親しむ場、アウトドアやキャンプなど、施設宿泊とは違うターゲット層につながる魅力を高める。 ・新たな観光ニーズに対応したターゲットを取り込む（ひまわり館にもRVパークを設置、マンガ館でも子どもの学びワークショップの開催）</p> <p>③天然記念物「はんだぎ」「自然・地域環境保全」 はんだぎセンターを活用した「オオサンショウウオ」とのふれあい交流体験や、ホテル発生時の案内を実施し、自然や環境への関心を高める。 ・環境を身近に感じることができる観光資源づくり（図書館イベント・サマースクールなどで活用）</p> <p>④新型コロナウイルス感染症収束後の観光産業の回復に向けた取り組み 観光事業者等の関係者との協議や域外との交流を重ね、新型コロナウイルス感染症収束後に観光産業が早期回復できるよう官民一体となって取り組む。</p>	<p>指標：宿泊客数(入湯税)</p>			
	<p>目標値</p>	<p>実績値</p>	<p>評価</p>	<p>次年度への課題</p>
	<p>100,000人</p>	<p>96,849人</p>		
<p>5-2 テレワーク施設の有効活用</p> <p>観光宿泊地である湯原温泉に整備したテレワーク施設に、新たな人材を獲得しながら「人」の流れを創出します。</p> <p>・都市部のクリエイターやベンチャー企業によるワーケーションやテレワーク利用を促進</p> <p>・都市部クリエイターと真庭人とのアイデアや知識の交流の拠点として活用</p> <p>・湯原温泉旅館、真庭観光局と提携したワーケーションの展開</p> <p>・一過性のワーケーション利用のみでなく、真庭の魅力を提供し、移住・定住の促進</p> <p><目標利用者数 300人、施設を利用する企業2社、移住者数 1組></p>	<p>指標:①利用者数 ②利用企業数 ③移住者数</p>			
	<p>目標値</p>	<p>実績値</p>	<p>評価</p>	<p>次年度への課題</p>
	<p>①300人 ②2社 ③1組</p>	<p>①320人 ②2社 ③5組</p>	<p>5月中旬からのオープンで、月に30人程度の利用がある。岡山市と連携し起業イベントに参加して施設利用を広報した。</p>	<p>個人利用がほとんどである。市内・県内・県外に分けて、企業の参画を促す必要がある。</p>

<p>6-1 「生むこと・育てること」を支援</p> <p>「湯原ふれあいセンター」や「つどいの広場」を活用し、多世代が交流できる憩いの場づくりとして、オレンジふれあいカフェや子育て支援についての研修会等を開催します。また、湯原学園（湯原小・中学校）では昨年より学校運営協議会を導入し、コミュニティスクールが始まっています。地域と連携し、子どもの可能性を最大限伸ばせるよう「地域とともにある学校づくり」の支援を進めます。</p> <p>①親子クラブ、愛育委員、栄養委員の三部合同による子育てサロンを開催 ②子育て世代が集うイベントを開催（子育て関係、生涯学習関係、図書館関係） <目標 子育て世代の参加者数 2,000人> ③小・中学校の行う「ふるさと学習」の支援（生涯学習推進事業） ④「地域とともにある学校づくり」の仲間づくり講演会開催 <目標 講演会実施数 1回></p>	<p>指標:①講演会開催数 ②子育て世代の参加者数</p>			
	<p>目標値</p> <p>①1回 ②2,000人</p>	<p>実績値</p> <p>①1回 ②1,954人</p>	<p>評価</p> <p>①三部合同による子育てサロンを1回開催 ②子どもが主体となるイベントを多く開催できた。 ③小・中学校のふるさと学習に関わることができた。 ④地域学校協働本部の発足講演会を開催。</p>	<p>次年度への課題</p> <p>利用者の確保については引き続き魅力ある取り組みを行い、増加、確保を目指していく。 湯原つどいの広場施設の老朽化については、湯原保健センターへの移転の話もできているため、子育て支援課等と協議し慎重に進めていく。</p>
<p>7-1 管内公共施設の有効活用及び効率的運営の推進（活動と居場所が混ざり合う新しい「まちの居間」活用）</p> <p>湯原ふれあいセンターを、「活動と『居場所』が混ざり合う、まちの人も、訪れた人もおらかに受け入れる、ふれたりつながったり、思いがけない活動に出会える場所」として、また、「新しい『まちの居間』のようなスペース」として、湯原地区（もちろん真庭市民全員にも）の皆さんに愛される公共施設に育てていきます。</p> <p>①湯原図書館で、子どもから大人まで、さまざまな世代が参加できるイベントを開催 ②交流スペースを活用して、ひとときカフェなどのイベントを開催 ③ふれあいセンター、はんざきセンター、はんざきねぶた倉庫、湯っ足り広場を一体とした、湯原温泉街を回遊できる仕組みを構築</p>	<p>指標:湯原ふれあいセンター延べ利用者数</p>			
	<p>目標値</p> <p>8,000人</p>	<p>実績値</p> <p>4,458人</p>	<p>評価</p> <p>①図書館独自及び公民館・図書館共催の形で各種講座を展開してきた。こども園との連携や新しい取組にも挑戦し、一定の成果を得ることができた。 ②市内飲食事業者に交流スペースを開放し、臨時開店営業を行うことで、地域内外からの交流人口拡大を行うことができた。③美作芸術温度で、はんざきセンターや湯っ足り広場への回遊が促進した。</p>	<p>次年度への課題</p> <p>①図書館を、単に蔵書がある、知識の集積場から、市民・地域住民が集い討議していける生涯学習機能の核、住民自治の拠点への変革に向けた取組を継続していく。 ②定着してきており新たな出店者も増えた。繰り返し開催することが大切。</p>

7-2 温泉施設の有効活用	指標:単年度収益的収支比率(収益÷費用)			
湯本温泉館・下湯原温泉(ひまわり館)・足温泉館の連携を図り、日帰り入浴から湯原地区の観光誘客(入浴・お土産・食事)につなげるとともに、コロナ感染症収束後の安定した流動人口を確保する仕組みを作ります。	目標値	実績値	評価	次年度への課題
①日帰り温泉3施設の統一した広報 ②湯本温泉館テレワーク施設の広報 ③下湯原温泉の指定管理者との深い連携 ・年間のイベントスケジュールの計画や、協力団体との連携を進める ④湯本・足温泉館の湯原にふさわしい運営の在り方を協議 ・従業員との対話を重ね、良いアイデアを実践する ・湯原観光関係者へ経営状況の説明 ⑤市が運営する3施設と、湯原温泉宿泊施設との連携 ・温泉旅館宿泊前後の日帰り温泉施設への誘導	①湯本温泉館 78% ②足温泉館 89%	①73% ②83%	ひまわり館とは対話を続け、良い関係を築くことができた。温泉施設との従業員とも対話をし、こちらのありき姿、と実践するうえでの難しさなどを協議してきた。	日帰り温泉施設のPRの強化のため、従業員・職員のアイデアを形にして実践していく。ひまわり館とも連携して、さまざまイベントにチャレンジしていく。観光・旅館関係者とは湯原の実態を含めた協議が必要。